

医原病

大量の薬をのまされたり、ワクチン接種など過度の医療行為が新たな病を作り、医師の不用意な言葉で病状も悪化します。自分自身が身体にとって最高の名医であることに気づきましょう。

濱井千恵(御園治療院代表・鍼灸師・ターラ・ヨーガクラブ主宰)



医原病

昨年の夏、AVAnetの会報誌で紹介されていた岡本裕さんの本に「医原病」という言葉がありました。これは、医師の不用意な言葉によって精神的なダメージを受けたりすることの総称でしたが、現在では広く投薬、注射、手術の過失など、医療行為全般が原因となって発生する病気や障害のことを指しています。

そのような「医原病」の中で、私が気になることは、大切な日本の子供たちに対するワクチン接種により、ミオトニー、てんかんや自閉症、多動症、そして劇症型の喘息が誘発されているのではないかと疑う看護施設の職員達が大半のことです。つまり施設での聞き取り調査で、発症時期とワクチン接種との相関があるらしいのです。そしてそれらを検証しようという親たちの会もあちらこちらで誕生してきました。

そのほかに、治療薬による副作用や、妊婦のX線撮影による奇形、抗生物質の大量長期投与による菌交代現象でおこるMRSAやカンジタ症なども「医原病」と考えられ、輸血によるC型肝炎やエイズなどは大きな社会問題となっております。

また医療行為の中で、薬料治療後の咬合不全によって起こる身体の歪みから、多種多様の不定愁訴や様々なアレルギー疾患を誘発し、アマルガムなどの詰め物で、金属アレルギーによる難治性の掌蹠膿疱症になった人もいます。

このように医療が患者を害することについては、古代ギリシャの時代より知られていて、「ヒポクラテスの誓い」：自身の能力と判断力に従って、患者に利する治療法を選び、害となる治療法を決して選ばない」は医療従事者の哲学であるはずですが、

ところが昨今の医療を見ると、害するどころか、トンデモの部類に入る人口削

滅の疑惑を拭いきれないので、初端から皆さんが驚くようなタイトルで投稿させていただきますました。

医師の言葉は劇薬か妙薬か

当院は鍼灸院である上に実費診療なので、訪れる患者さんの中には、長年西洋医学の治療に精根尽き、人にしつこく勧められてやっと来院する方もいます。

そのような状態の人は共通して、医師に一抹の希望すらも踏みじられ、硬く心を閉ざし、病氣に対して諦めの気持ちや、治療に対する猶疑心も強くなっています。

このような傾向はどういうわけか、男性の患者さんに多く見られます。それは不用意な医師の言葉で、自尊心まで傷つけられた証ではないでしょうか？

ごく最近も、殆ど寝たきり状態だったリウマチの男性患者が来院しました。両腕の挙上制限も多く、肘や肩関節の激痛で眠れないので、大量のステロイドと痛み止め、更に睡眠薬も5年ほど続けていたようです。

彼が医師に言われてきた言葉は、「あなたの病氣は一生治らない病氣です」「寝たきり生活になるのは時間の問題ですから、1日も早く車いすを買いなさい」だったそうです。奥さんを隣臓癌で亡くし、長年経営してきた会社まで人手に渡った彼にとって、この担当医の言葉は地獄に突き落とされる思いだったと推察できます。

確かに、男性のリウマチは治療家にとっては結構治しにくい疾患ですが、鍼治療と氣功治療で身体のエネルギーのパラメータを整え、1時間の特殊なマッサージを加えると、彼の場合は1回目から劇的な変化が現れました。3回目の治療を終えたゴールデンウィークには、高野山までバスツアーに出かけられるほどになったのです。昨年は、車椅子に乗り友人たちに

連れられて花見に出かけたらいいのですが、その友人たちは彼の回復振りに驚きを隠せなかったそうです。

心身一如・心は病を超える

私たちが実費診療の鍼灸師は、保険診療で手厚い保護を受けている医療機関ではないので、毎回この一瞬に確実な効果を出さねばなりません。この方の場合、強烈な精神的ストレスが、普段からの持病であった糖尿病からくる心臓の病に更に負担をかけたわけですが、さすが、初診の患者さんに私的な内情を聞き出すのはとてもタイミングが難しいので、まずは本人の主訴である動かない腕が、軽い刺激で動くことを実感してもらい、希望を持ってもらいます。

たった一本の鍼で、2つか3つほどの僅かなツボ刺激でそこまでの成果を出すためには、一人の人間の全体をしっかりと観察できなければなりません。ですから、その方のカルテが受付から回ってきた時点で、まず字の書き方から診断します。次にトアをあげる動作、質問への答え方、息の使い方、声質や椅子の座り方、そして全身の歪み具合、特に鎖骨から肩先などの胸郭全体の大きさを必ず観察します。それは、長年ストレッチを抱えた人は、必ず呼吸不足になつて肩が上がっているからです。

病氣の原因にストレスが大きく関与していると判断した場合、私は時間をかけて、その人が発病した頃の自分を思い出してもらい、その時の苦しみや悲しかった言葉にしっかりと耳を傾けさせてもらいます。

そして、それはどんなに辛くても済んだ過去の記憶に過ぎないということを、本人に心底腑に落としてもらうのです。その事実を腑に落とし始め、患者さん自身が気持ちの整理がつき始めるころに、どういふ訳か痛みで硬直していた身体もしなやかにになり、関節の可動域が増し、だんだん笑い話

まで増えてくるのです。手技ばかりではなく、最後は言葉で傷ついた脳の記憶を、言葉で治療するわけです。

患者さん自身が笑うということは、安易に吉本のテレビや落語を聞いて笑うその場限りの笑いとは質が全く異なります。自身自身の病の本質に気づき、更に閉ざされた心が氷解する笑いは、免疫を賦活させる上に、その人の人生観すらも一瞬で変えてしまふのです。

そういう患者さんを一人人近く見てくると、やはり人間は心で生きているのだという思いになります。近代医学や科学がどう言おうと、人間は魂魂という見えない心で生きているのだ、と実感するのです。

医師の敗北宣言

彼の場合はほんの一例に過ぎません。担当医師の不用意な言葉でどれほど傷ついてしまった人が多いことでしょう。抗がん剤の副作用で苦しむ患者をいとも簡単に心療内科へ送る始末です。あるいは、苦しい抗がん剤を拒否すると、何のためらいもなく一気に終末期医療の方に送られて、モルヒネを打つだけが終わってしまいます。

また、整形外科の医師は、膝や腰が痛い人に、「年だから仕方がない」とか「老化現象だ」という言葉をやたら使い、痛みを弱めるようにマイノイドコントロールします。ましてや50代の人にもそういうことを言うのですから、聞いた口が毒がります。そして痛みを長年訴える患者さんに対して、痛み止めだけではなく、抗うつ剤や睡眠薬を大量に処方するのですが、その膨大な量に、私たちは毎回愕然とする思いです。

膝や腰の痛みの原因を、レントゲンやMRIの検査後に、骨が摩耗しているからだとか、歪んでいるからだとか整形外科医は診断しますが、摩耗していても歪んでいても痛くない人は大勢います。その差は骨や関節

節を支えている筋力による違いなのです。別にマッチョな筋力が必要な訳ではなく、如何に重力に対して正しい位置に関節を置くように筋肉が作動するかによるのです。ですから、当院はどのような病気であろうと姿勢を重視します。

このような医師の言葉は、自分が治せないことへの責任逃れであり、知識や技術、あるいは医師としての努力不足を患者に転嫁しているに過ぎません。

ですから、私が難病の人に必ず言う言葉は、「医師の負け惜しみのマイノイドコントロールに引つかからないでください」に尽きるのです。

抗精神病薬の乱用

大人はまだ治療の選択という自由があります。ですが、思春期の子供に多い悩み、あるいは不登校や学習困難までが全て脳の疾患だから薬で治せるといって、安易に子供たちへ抗精神病薬が処方されることは、将来どのような医原病が発症するか、だれも予測ができません。

昨今は子供への抗精神病薬の処方が増えすぎていて、保健室の養護の先生たちは非常に驚いています。私の住む三重県でも一部の中学校や高校をモデルに、「こころの健康政策構想会議」と呼ばれる有識者会議の提言書が厚生労働省から出され、子供への抗精神病薬の早期投薬を推奨する動きがありました。

学校に派遣された精神保健福祉士、つまり教育大学で臨床心理学を学ぶ学生が保健室から情報を集め、問題となる子供やその親に、「将来的な精神疾患を予防するから」との説明で、発症前から抗精神病薬を飲ませようというのです。ですが、この「精神疾患の予防」という概念自体、全く医学的根拠があるわけでもなく、良心的な精神科医の多くが「非論理的医療行為」として非難

するものです。

癌検診への疑問

最新の癌検診にPET（ペット）という検査法がありますが、「早期がんの85%を見逃していた」とテレビ朝日のニュースでやってきたのをご覧になりましたか。PET検診は、もう随分前に、アメリカでは40歳以下の人に使用してはいけないという指針が出ています。この検診を受けることで、癌が誘発されることも解りました。

ところが、日本ではそのような報道は一切見られません。特にこの癌検診に対しては、様々な警告が発せられているのですが、まだまだこの国民皆保険という奇妙な制度が邪魔をして、検診が無利無損を受けなければ損だとか、癌になったら怖いという思いが先行し、豪華な高級ホテルのような病院でこそって人間ドッグを受ける始末です。ところが、人間ドッグで異常が見つからなかったのに、その翌日脳内出血で急死した人、あるいは末期の卵巣癌まで見逃されて、卵管捻転を起こし急死した人もいるのです。一人人間ドッグとは何を検査しているのでしょうか？

今は玉石混濁であろうと、ある程度の癌の基礎知識はインターネットから得ることが出来ます。癌検診で見つかったときは、もう発症から10年あるいは20年以上経過しているということであって、早期発見などという言葉を使うこと自体がおかしい気がするので。

医療保険制度がここまで国費の赤字を生み出している真の原因と、昨今の医療行為は本当に国民のためにあるのかどうか、そろそろ私たちは気づく時期に来ているのです。

診療指針の裏側

例えば、メタボリックシンドロームなど

主要40病種の「診療指針」を作成した国立公立大学医学部の医師の9割が、その病気の治療薬を製造・販売する製薬会社から寄付金を受領しているという話も聞きます。献金を受けた医師が、病気の診断基準や検査法、治療法について「診療指針」を作成するのですから、それは業界の要望と自分たちの利益になるために作るのだから当然だと思いませんか？ ある報道によれば、「メタボ基準」の作成チーム11名の医師全員に、2002年から2004年までの3年間に、高血圧などの治療薬メーカーから約14億円の寄付があったとありました。

平成3年に私が鍼灸学校で学んだ医学総論の教科書では、高血圧は165/95mmHgとなっています。平成20年では高血圧基準値は135/85mmHg以上、正常血圧基準値は125/80mmHg未満です。この差を皆さんはどのように考えますか？血圧がよく目にする「本態性高血圧」の「本態性」とは「原因不明」ということです。更に1日の血圧を詳細に測定すると、トイロを我慢したただで20mmHgほどは軽くなります。血圧とはそういうもので、自然の気圧と同じなのです。年齢や環境も考慮しない血圧の数値に意味はありません。疑いの目を向ければ、健康な人に一生手放せない薬を飲んでもらって、未永く通院してもらおう病名は、病院経営には非常にありがたいわけです。

老人の場合、血圧が高いのは、血管もそれこそ老化で硬くなっているのですから当たり前です。それを無理矢理下げれば老化や呆けを促進させ、遅が愚ければ、睡眠中に一気に血圧が上がりすぎて、朝起きたら仏になっただけということも多々あります。まずはこれを機に、病気とは何かをしっかりと見直してみませんか？

